

有田・小田部51

—有田遺跡群第238次調査報告—

2013

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。の中でも早良区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務あります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市ではそのような開発によってやむを得ず失われていく遺跡について事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する有田遺跡群の発掘調査報告書は共同住宅の建設に伴う調査成果についての記録です。この調査では弥生時代後期から古墳時代前期と中世の集落が出土しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2013年3月22日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

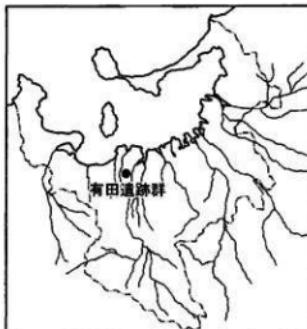
例言

- 本報告書は早良区有田1丁目3番1、3番12の共同住宅建設に伴って2011年1月11日から2月24日にかけて発掘調査を行った有田遺跡群第238次調査の報告書である。
- 本書に収録した調査は福岡市教育委員会(現 経済観光文化局)の屋山洋が担当した。
- 遺構の実測と写真撮影は屋山が、遺物の実測は濱石正子が、製図は屋山が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

遺跡調査番号	1033	遺跡番号	0309	分布地図番号	No82 原
調査地地番	福岡市早良区有田1丁目3番1、3番12				
開発面積	721m ²	調査面積	243m ²	調査原因	共同住宅建設
調査期間	20110111～20110224		担当者	屋山 洋	

有田・小田部 51

—有田遺跡群第238次調査報告—



遺跡略号 ART-238
調査番号 1033

2013

福岡市教育委員会

I. はじめに

1. 調査に至る経過

平成22年(2010年)11月22日付で福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に福岡市早良区有田1丁目3番1、3番12における埋蔵文化財の有無についての照会(事前審査番号22-2-833)が提出された。申請地は有田遺跡群の東端に位置し、平成8年6月11日に行った確認調査(事前審査番号8-2-93)により表土下100cmの鳥栖ローム層上面で遺構が存在することと、その上に遺物を含む厚さ15cmの暗褐色粘質土層が確認されていた。この確認調査の結果と今回の共同住宅建設の計画図を照らし合わせると、北側道路に面する駐車場部分と擁壁部分については掘削に伴い遺跡の破壊が避けられないため、工事に先立って埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存を図り、2棟の建物は基礎を盛土内に収める慎重工事とすることで協議が成立した。以上の協議を受けて平成23年(2011年)1月11日から2月24日の期間で発掘調査を行った。

調査期間中は原因者及び関係者各位から多大なご協力を得た。記して感謝したい。

2. 調査の組織

平成22年度(調査)

教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

埋蔵文化財第2課課長	田中壽大	埋蔵文化財調査課課長	宮井善郎
調査第1係係長	米倉秀紀	調査第1係係長	常松幹雄
調査庶務	井上幸江	調査庶務	川村啓子
調査担当	屋山 洋	調査担当	屋山 洋
作業員	浦伸英 岡部安正 片岡武俊 河原明子 桑原美津子 中村健三 平田周二 吹春憲治		
整理作業	藤野洋子 坂口龍子		

平成24年度(整理・報告)

経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

3. 遺跡の立地と環境

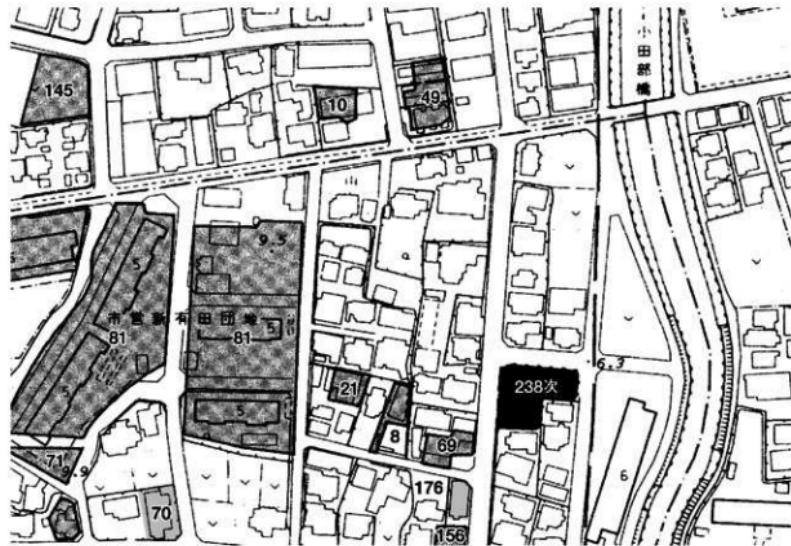
有田遺跡群は早良平野の北側、室見川の右岸に位置し、標高約15mの南北1.7km、東西0.8kmの台地上とその周辺に分布する。台地は雨水等の浸食により大小の谷が入り込んでおり、八つ手状の複雑な形状を呈す。台地上の古い遺物としてはナイフ型石器などの旧石器が出土している他、縄文時代では中～後期の貯蔵穴がある。弥生時代前期になると溝や集落が見られるようになり、後期になると台地上の全域に竪穴式住居や柱穴群などの集落が拡大する。古代には台地頂部近辺で早良郡衙と考えられる大型掘立柱建物群が出土した他、三本櫛とそれに囲まれた倉庫群など台地全体に遺構が密に分布する。その後戦国時代になると荒平城主である小田部氏の里城が築かれ、遺跡南半に堀等が分布する。

今回調査を行った238次は台地の東端に位置する。調査区の東端は道路から2m近く高くなっているが、これは台地東側を流れている金屑川によって削られた痕跡と思われる。

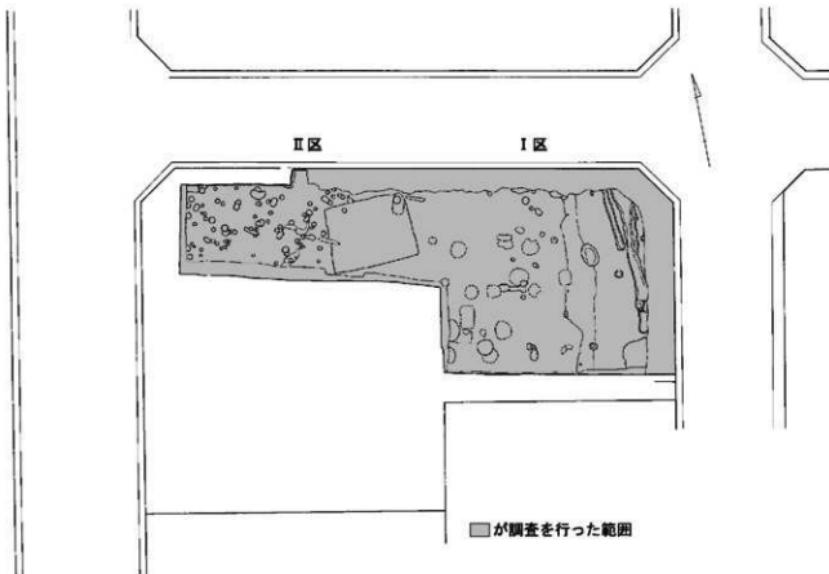
今回の調査では古墳時代初頭の竪穴式住居1軒と古墳時代後期の土坑1基、弥生時代～古墳時代の柱穴群を確認した。その他に土坑数基、井戸1基、大型土坑1基を確認したが、遺物がほとんど出土していないので、遺構の時期については不明である。竪穴式住居は一辺が4×5mの長方形を呈し、短辺にベッド状遺構が付く。床面直上で甕や壺、椀などが出土しており、住居廃棄時の祭祀の可能性がある。調査区中央から東側にかけては鳥栖ロームと八女粘土の境界付近で炭化した倒木が出土した。鳥栖ロームが堆積した時の火碎流にまきこまれた木の残骸と思われる。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査区周辺図 (1/2,000)



第3図 調査範囲図 (1/300)



第4図 調査区全体図 (1/120)

II. 調査の記録

1. 調査の経過

今回は東側の擁壁部分をⅠ区、西側の駐車場切り下げをⅡ区として調査を開始した。1月11日に発掘機材の搬入、翌12日に重機を使用して表土剥ぎと外柵の設置を行い13日からⅠ区の遺構検出と掘り下げを行った。掘り下げを1月14日に終えⅡ区の調査を開始した。その後、原凶者側から東西2棟の建物のうち東側建物の基礎を盛土内に收めるのは困難との申請があったため、東側建物部分についても発掘調査を行うこととなり、Ⅱ区の調査が終了した2月9日に打って返しを行い、東側建物部分の調査を行った(第3図ではⅠ区に含む)。調査は2月24日に機材の撤去、25日に埋め戻し等を行って終了した。

2. 古墳時代の遺構と遺物 (出土した遺物の詳細は2ページの遺物台帳に記載。)

1) 穴式住居 調査区中央で1軒検出した。

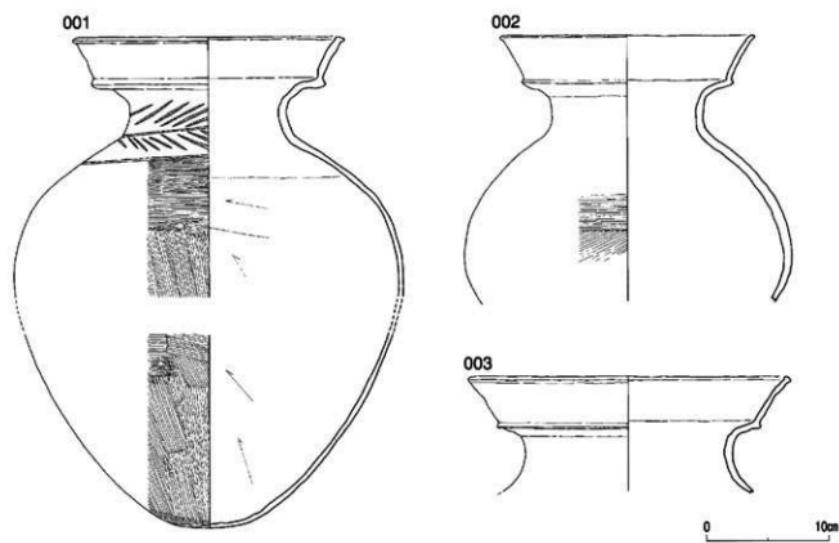
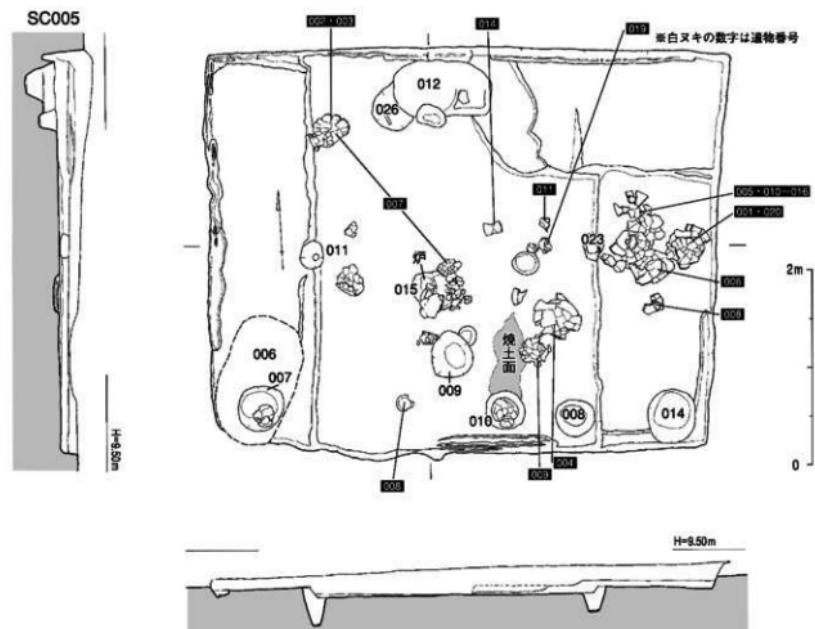
SC005(第5図) 平面は東西に長い長方形を呈し、主軸はN-87°-Eを測る。長径536cm、短径415cm、床面までの深さ35cmを測る。床面中央の炉の他、北壁寄りで長さ85cm、幅30cmの範囲で赤変している。

2本柱で掘方径25cm、柱間は2.9mを測る。住居の外周に断続的に幅10~20cm程の壁溝がある。

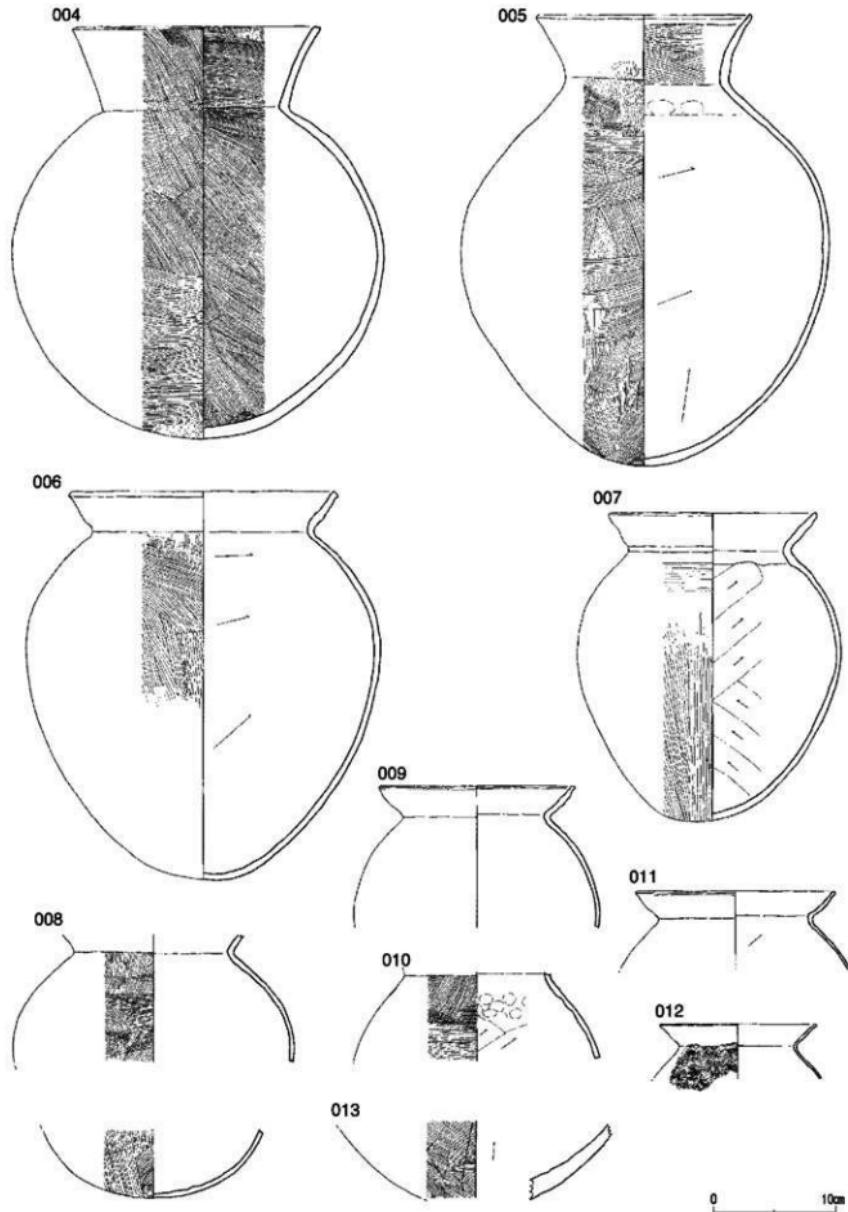
出土遺物(第5~7図001~023) 低床面とベットの床面直上で多くの土器片が出土した。土器は出土時には完形に近いものもあったが土圧で細片化しており、復元できたものは少ない。001~003は二重口縁壺である。001は口径22cm、器高約40cmを測る。淡黄褐色を呈し、1mm程の砂を多く含む。002は復元口径21cmで白色を呈す。黒斑有り。破片はほぼ揃っているが細片化し復元は不可能。003は復元口径26cmを測る。淡黄褐色を呈す。004と005は壺で004は口径20.2cm、器高33.8cmを測る。

色調は淡黄褐色を呈す。005は口径17.7cm、器高37cmを測る。淡黄褐色を呈す。006~013は甕で006は復元口径22cm、器高31.8cmを測る。淡褐色を呈す。口縁から胴部に黒斑有り。007は口径17.2cm、器高25.3cmを測る。黄褐色を呈し外面に煤が付着する。008は細片多く復元不可。淡黄褐色で内面胴部はヘラケズリを施す。009は口径16cmを測る。摩滅のため調整不明。010は灰褐色を呈し、外面に煤が付着する。011は復元口径16.4cmを測る。灰黄褐色を呈し摩滅著しい。内面胴部はヘラケズリを施す。012は復元口径12.8cmを測る。摩滅著しい。外面胴部はタタキを施す。013は甕の底部か。外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。014~015は鉢である。014は復元口径34.4cmを測る。口縁は横ナデ、胴部内面はヘラケズリを施す。015は復元口径34.8cmを測る。黄白褐色を呈す。摩滅・剥離が著しい。016~017は高杯である。016は復元口径22cmを測る。内面はハケ後に密なミガキ、外面は継ハケ後粗いミガキを施す。018は小形鉢で口径17.2cmを測る。明黄赤褐色を呈す。内面胴部は摩滅のため調整不明。019は丸底壺で口径10.8cm、器高10.5cmを測る。明黄赤褐色を呈す。摩滅のため調整不明。020は長頸壺口縁で、摩滅のため調整不明。021は縄文時代晩期の大型深鉢である。暗茶褐色を呈す。両面に条痕文を施すが外面はその後横方向にナデを施す。022は砂岩製で砥石と思われる。023は鉄製品である。SK012脇の床面で出土した。現状で長さ12.2cm、幅1.5cmを測る。鋸のため不明瞭であるが、断面は三日月状を呈す。

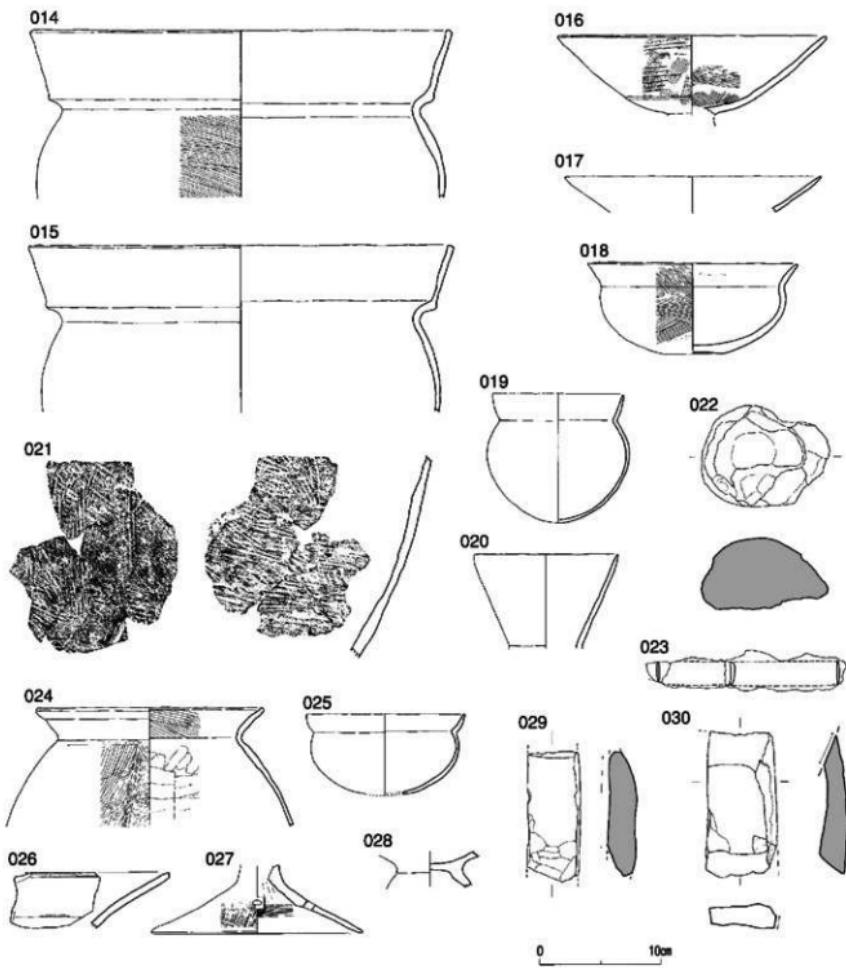
(a)ベッド状遺構 北辺を除く3辺にベッド状遺構がつくが、本来は東西短辺のみであり、南辺は後から拡張されたもので、また南辺については屋内土坑(SK012)から西側だけで東側にはベッドはつかない。ベット状遺構は幅93~113cmを測る。床面からの高さは現状で10cm前後で、東西のベッドは床面から6~8cmは地山を削り残してその上に粘土を貼るが、南辺のベッドはすべて盛土である。本来のベッド部の高さは削平のため不明である。床面とベッド状遺構の境で板の圧痕と径2cm程の杭の痕跡が出土した、ベッド部盛土の崩落防止に板を貼り、木杭で押さえたものである。



第5図 SC005実測図1 (1/50・1/4)

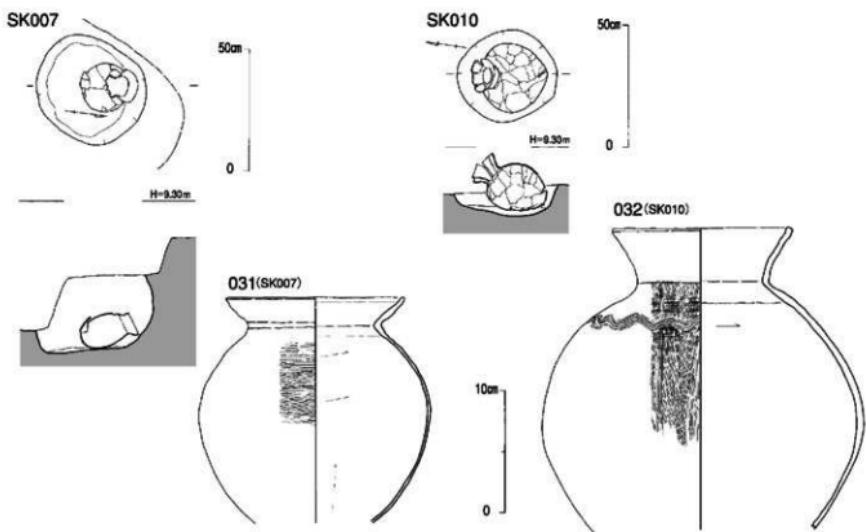
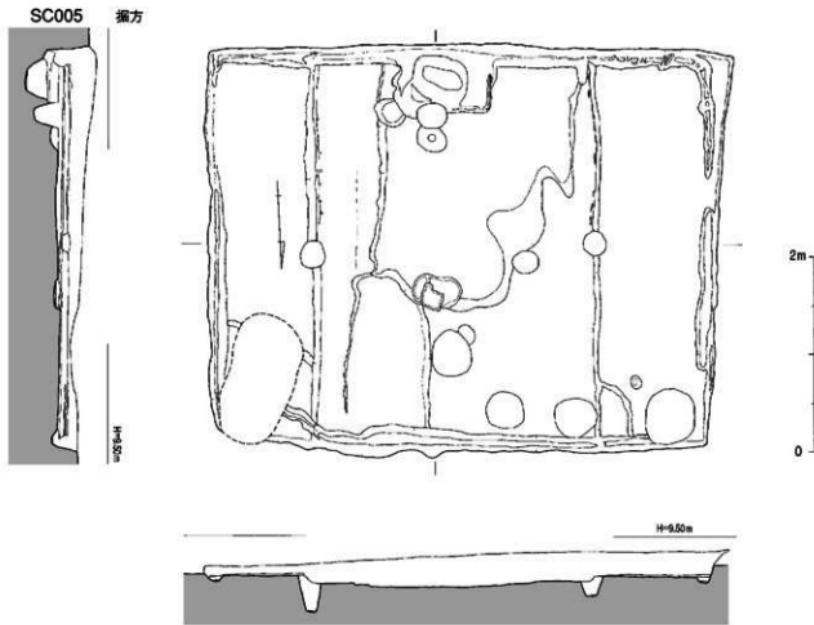


第6図 SC005 実測図 2 (1/4)

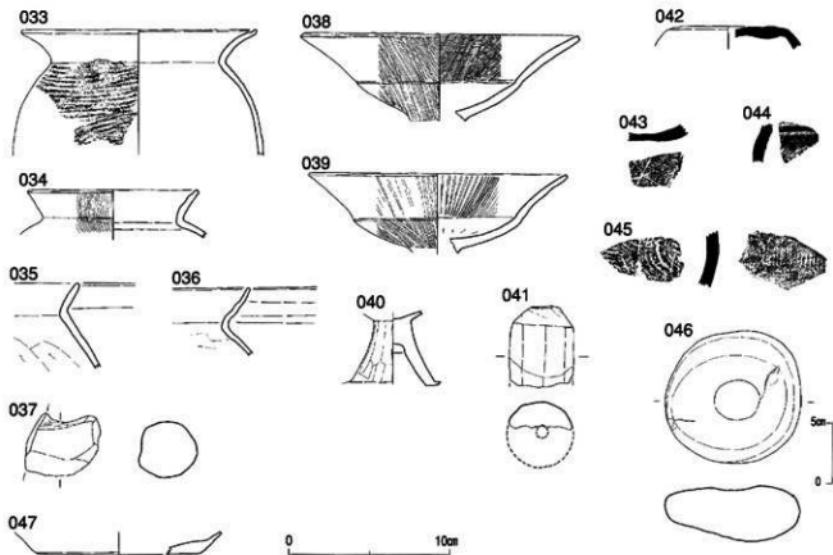
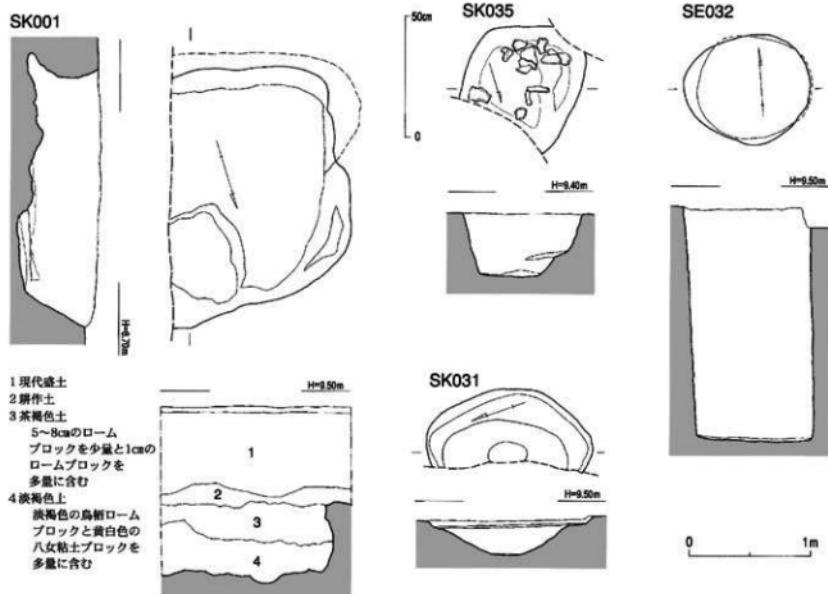


第7図 SC005 実測図3 (1/4)

(b)屋内土坑(SK007・010・012・014)SK007と010、014は住居北辺部に位置する円形の掘り込みで、007と010からは完形の壺と壺が出土した(第8図031・032)。貯蔵用もしくは住居廃棄時の祭祀の可能性が考えられる。012は南辺中央に位置する東西112cm、南北53cmの長方形の掘り込みで北側と西側壁沿いに溝を有する。掘方中央に径50cm強の掘り込みがあるが、ここに後述する炭化木材があつたため、炭化物が含まれる範囲を人為的な掘り込みと誤認して掘り下げてしまい詳細な形状は不明である。SK012からは第7図の024～030が出土した。024は壺で復元口径18.6cmを測る。黄～赤褐色を呈し胎土中に砂を多く含む。025は鉢で復元口径13cmを測る。黄褐色で少し赤味をおびる。026～028は高杯で026は壺、027と028は脚部である。026は外面はハケ後磨き、内面は摩滅のため調整不明である。



第8図 SC005 実測図 4 (1/50・1/20・1/4)



第9図 土坑実測図 (1/40・SK035は1/20) 包含層出土遺物実測図 (1/3・046は1/4)

027は端部径17.3cmを測り、4方に穿孔を施す。外面は縦ハケで、内面は脚部が絞り痕の上からケズリ、脚部は横ハケを施すが摩滅のため不明瞭である。028は灰黄褐色を呈し内面はハケ、脚内面は指オサエ後ナデを施す。外面は摩滅のため不明である。029・030は底石と思われる。粘板岩製で底面はわずかに残るのみである。

(c)床下掘方(第8図)低床部の中央から南側にかけて床面から更に3~4cmほど掘り下げた後、掘り下げ時に出たロームを貼って床面を築いている。

3. その他の遺構と遺物

1)土坑

SK001(第10図) I区南東隅に位置する。東側は削平されており、現状で南北223cm、深さ60cmを測る。底面は北端に径70cm、深さ10cmの掘り込みがある他は凹凸が激しい。埋土は上層が暗茶褐色でロームブロックを含み、下層は淡褐色土で黄白色粘土と淡橙色土のブロックを多量に含む。遺物は古墳時代後期から古代の須恵器大壺や壺蓋の他に12世紀頃の瓦質鉢が出土した。

SK031(第10図) I区南東隅に位置し、西側半分が調査区外に延びる。現状で南北136cm、深さ30cmを測る。遺物は龍泉窯系青磁碗II類や茶褐色釉を施した陶器壺等が出土した。13世紀中頃以降か。

SK035(第10図) I区南東隅に位置しSE032に切られる。平面は隅丸長方形で東西径46cm、深さ26cmを測る。断面は逆台形で西側に段が付く。埋土は淡褐色を呈し、須恵器壺と土器の小片が出土した。

2)井戸

SE032(第10図) I区南東隅に位置しSK035を切る。平面は楕円形で長径103cm、深さ183cmを測る。埋土は中央と縁に分かれしており、不明瞭だが径90cm前後の木製の井筒と思われる。埋土は掘方が黒褐色、井筒が茶褐色土で白色粘土ブロックを多量に含む。遺物は時期不明の土器片が1点出土した。

3)溝

SD002-003 調査区の東端に位置する2条の溝で、埋土は褐色～茶褐色を呈しロームブロックと白色粘土の小片を含む。近世以降の烟に伴う構と思われる。

4)包含層出土の遺物

包含層は暗褐色を呈し調査区西端から幅9mの範囲に広がる。堆積部分のローム上面は東側より若干低くなっている、深い谷であったと思われる。出土遺物(第10図033~046)。033~036は土師器甕、037は十手質甕である。038~040は高坏で038・039は弥生時代後期末に属する。041は輪の羽口、042は須恵器壺蓋、043は須恵器壺、044~045は須恵器甕、046は安山岩製敲石、047は土師坏である。

4. 鳥栖ローム内に含まれる炭化材について

調査区東側から中央部にかけての鳥栖ローム内で炭化木材を確認した(図版3-6~8)。出土した層位は下層の八女粘土との境に近く、周囲には攪拌された様な炭化材と炭化物の薄い層が見られた。図3-7の円形の炭化材は径が40cm程あり、幹の断面と思われる。鳥栖ロームが堆積した際に火砕流に巻き込まれた倒木が炭化したものと考えられる。

5. 小結

古墳時代と古代から中世の集落を検出した。後世の造成により調査区東側では遺構の遺存状態は悪い。本調査区は有田遺跡群がのる台地の東端部に位置するが、調査区とその東側に隣接する道路とは2m弱の高低差があり、これは金屑川によって削られた崖面と考えられる。



1. II区全景(東から)



2. I区全景(西から)



1. SC005床面(南から)



2. SC005掘方(南から)



3. SC005ベッド部遺物出土状況



4. SC005床面遺物出土状況!



5. SC005床面遺物出土状況2



6. SC005炉



7. SK012遺物出土状況



8. SK007壺出土状況



1. 調査区東端土層(東から)



2. SK001(東から)



3. SK001土層(北から)



4. SK035(北東から)



5. SE032(西から)



6. 炭化木材出土状況1(北から)



7. 炭化木材断面(南から)



8. 炭化木材出土状況2(調査区北側断面)

報告書抄録

ふりがな	ありた・こたべ							
書名	有田・小田部51							
副書名	有田遺跡群第238次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1176集							
編著者名	屋山 洋							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1							
発行年月日	2013年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
有田遺跡群238次	早良区有田1丁目 3番1、3番12	市町村	遺跡番号	33° 33' 54"	130° 20' 16"	20110111～ 20110224	243m ²	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
有田遺跡群 第238次調査	集落 集落	古墳時代前期 古代～中世	堅穴式住居 土坑	土師器甕・壺 須恵器・陶磁器				
要約	古墳時代前期の堅穴式住居のほか古代～中世と思われる土坑数基を検出した。堅穴式住居の床面からは廐棄状況がよく判る土器群が出土した。							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1176集

有田・小田部51

—有田遺跡群第238次調査報告—

2013年（平成25年）3月22日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 高 良 印 刷
福岡市中央区港2丁目4番1号

